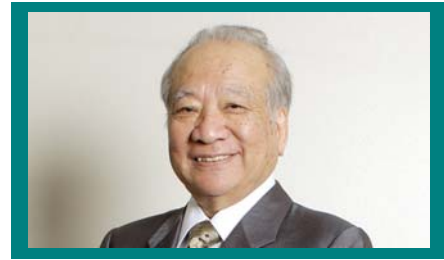


21世紀の日本のかたち（18）

-- 日本の食と農のゆくえ --



戸沼幸市
〈(財)日本開発構想研究所 理事長〉

先日（5月29日）、当研究所の下河辺淳アーカイブスの対話シリーズ（第2回 Quarterly Report 企画）で、「食と農」について、国立民族学博物館元館長の石毛直通さんと下河辺さんとの対談がありました。私もお二人の対話を拝聴しながら、これまでに年に1,000食以上として70余年の今日まで、8万食余りもよくも食べてきたものだと思います。この話題についてあれこれと連想したことでした。



〈対談風景〉

1. 食の周辺

今年前半から続いている世界的心配事として、新型インフルエンザの流行があります。われわれの日常の食材である豚や鳥が感染力の強いウィルスをもって人に接しているとは気味悪いことで、

食の安全とも無縁のことではないでしょう。

BSE問題、中国産ギョーザ毒物混入事件など、日本人の食のグローバル化に伴って、食のあり方、食の安全性について気になる昨今です。

対談の中で、「今の時代ほど食の安全な時代はない」という石毛さんの話でしたが、日本の食文化はどこにゆくのでしょうか。それにしても、私どもの昨今の食生活は大変な変わりようです。

昭和一桁生まれの私ども世代の食体験は劇的ともいえるものです。幼少期、戦前は家族そろっての、母親手作りの一汁一菜と米飯、つづく戦中は配給米を分け合って食べ、終戦直後は飢餓・栄養不足状態でした。母親は近くに畑をつくってイモやトマトを植えて家族の食を補っておりました。それでも私の育った北海道函館は魚や昆布の海産物もあり、地産地消で、終戦直後の大都会ほどではなかったようです。

私は昭和28（1953）年に東京に出てきましたが、新宿あたりのヤミ市には食に苦しんだ跡が残っていました。人びとを取り巻く食環境が大きく変わったのは日本が高度経済成長期に入ってからでしょう。米食中心から、主食にパンも入り、肉類、牛乳、乳製品、果実と食がにぎやかになりました。和食を押しつけてフランス料理、イタリ

ア料理、中華料理等々、世界中の料理が食べられるようになりました。私世代の子供時代に比べると、毎日が盆と正月のご馳走です。逆にいえば、今の日本の子供達は昔の食糧難など想像することもできないことでしょう。

この間、日本の人口は1億人を超え、現在は1億2,000万人となり、さらに世界一の長寿国にもなりました。日本人の体格もオリンピックで世界と互角に競えるほどにずいぶんとよくなりました。

現在では、世界の食糧不足地帯を尻目に、カロリーの取り過ぎ、栄養過多を心配しなければならないことになりました。その一方で、食べ残し、過剰除去、直接廃棄の量は200～400万トン、さらに、いわゆる食品ロス（食品由来の廃棄物のうち可食部分と考えられる量）は500～900万トンと莫大です。食の大切さを言いながら、食を粗末にしている時代です。

2. 食糧自給率（40%問題）

平成18（2006）年の日本の食糧自給率は9年ぶりに低下し、カロリーベースで39%になり、日本政府の考える平成27（2015）年度までに45%にしたいという目標が難しくなりました。これに関連して、次の衆議院選をにらんで、各政党もマニフェストでこれに言及し、目標と政策を掲げています。共産党は「農業再生プラン」で自給率50%台回復を、社民党は「田んぼの底力（そこちから）」で食料自給率を向上、公明党は耕作放棄地の活用他で「食料自給率50（ゴーマル）プラン」、民主党は農業者戸別所得補償制度や直接支払制度の導入によって農林水産業の足腰を強化し、食料自給率を10年後に50%、20年後に60%に、また、自民党は、「わが国の食料の安定供給の確保に向けた提言（案）」で食料自給率

50%達成と、いずれも食糧を安定的に供給することは国の責務であるとして、食料自給率の向上を掲げています。

しかし、食糧自給率が40%を切っても、これに対しては、人びとの食の安全性への敏感な反応に比べて、消費者、都市住民の関心は必ずしも高くないように思われます。むしろこの経済不況下、給与が下がり、食費の出費が大きくなることに切実な問題を感じているのが実情でしょう。

食料自給率は生産額ベースでは約70%を確保していることだし、国内の食糧市場をもっと開放し、安い価格の外国の食糧を輸入すべしという意見すらあります。

また日本の人口が現在の政府機関の推計では、1億2,000万人が1億人になり、22世紀には4,000万人になるという推計があり、長期的に人口が激減するので慌てることもないという極端な意見もあります。

しかし、21世紀初頭の近未来、1億2,000万人の食と農に絡んで、自給率40%を切ったことは大きな問題に違いありません。

日本の経済は、人口減少期に入りこれまでのように高度成長を続けるのは不可能でしょう。他方、世界の人口は依然として増加しつづけており、世界の食糧需給で、巨大人口国のインドや中国などは経済成長とともに食糧消費を増大させるでしょうし、あるいは食糧不足に悩む国々も多くあり、日本人の生存と生活の根幹を外国産に多くを頼ることは危険です。やはり「食糧を安定的に供給することは国家の責務」であり、国も政党も政策を競って日本の農を守り、自給率の向上を大いに進めて貰いたいものです。

3. 農のゆくえ

春、4月、5月と水田に青々とした早苗が植え

られた田圃の広がり、いかにも日本の風景であり、これを目にすると心がなごみます。

弥生時代以来、稲作によって日本人は連綿と命をつなぎ、ここまで育てられてきたわけであり、春の田植えから黄金の秋へと変わる田園は、日本の原風景です。

先日（6月10日）、思い立って上野から山形行き「山形新幹線 つばさ」に乗り、東北の田園を見ってきました。福島あたりまでの田圃は一面青々としていましたが、庄内に入ると、田植え直後らしく水面に早苗が初々しく並んでいました。

沖縄ではもはや稲刈りがあったと報じられていましたが、東北は桜前線を追いかけるように田植え前線が北上中といったところではあります。

有吉佐和子の「複合汚染」の中に、有機農業の先進地として紹介された置賜盆地^{おきたま}の米どころ、高島町に立ち寄ってみました。人間の巨大なエサ場、喧噪の高炭素社会東京と違って、田植えから半月ほどの日本の瑞々しい原風景が広がっていました。冬には1mを超す積雪地帯ですがここに住民にとって、北国の春はことのほか素敵なものに違いありません。

高島町農林課で話を聞きましたが、米作りが主体ですが果樹栽培が盛んであり、ブドウ（デラウェアの出荷量は日本一）、西洋梨（ラ・フランス）、サクランボ、リンゴと名だたるブランドを有しており、他に酪農（乳牛1,300頭、肉牛140頭）と複合経営の農業地帯とのことでした。

町として有機農法や減農薬栽培を取り入れ、有機米づくりは上和田地区で根強く続けられており、都市消費者に産地直売しているとのことでした。これに関連して、町が条例を定め、「遺伝子組み換え」の受け入れについては慎重な姿勢をくずしていないことに印象を受けました。

農業、農村問題が今直面している大問題は、こ

れまで日本の農、とくに水田を支えてきた昭和一桁世代が退場しはじめ、担い手の後継者をどうするかです。平均年齢70歳の高島ではまだ頑張っている貫ねぼとのことでした。併せて40歳台のひとびとがネットワークを組んで、中核農家が農地を集積して耕作する法人づくりを始めたり、企業の参入と家族経営の組み合わせなど、多面的に農の担い手づくりに取り組んでいる様子です。しかし今年度、町は国から更なる減反を求められており、これには頭を悩ましておりました。



<山形県高島町の田植え直後の風景>

減反政策については、段階的にしろ、国として政策転換すべしと私も考えます。

高島では、「たかはた共生塾」、「まほろばの里農学校」などを開設して都市住民との交流を活発に行っています。ここでは食の安全性や自然環境問題など、人間の生存と生活を支えている「農」を根本から問い直す作業を行い、これには都市住民に交じって海外からの参加者もあるようです。交流がきっかけとなって、ここに移住する人も現れ、立派な認定農家になっている人も現れています。

これら現場での農の研究会、勉強会の一つに、「屋代村塾」というものがあり、早稲田大学教師時代の私の同僚でもあった創設者故大塚勝夫教授を引き継いで、堀口健治教授が大学生の現地ゼミ、村民との交流を続けており、この村の産品を秋の早稲田祭に持ち込んでいます。

私も立ち寄ってみました。東京の大学の女子学生が修士論文のためとかで泊まり込んでいました。村づくりに一村一品運動がありますが、都会の大学と村の直接交流の一村一大学運動というものもよいかもしれません。

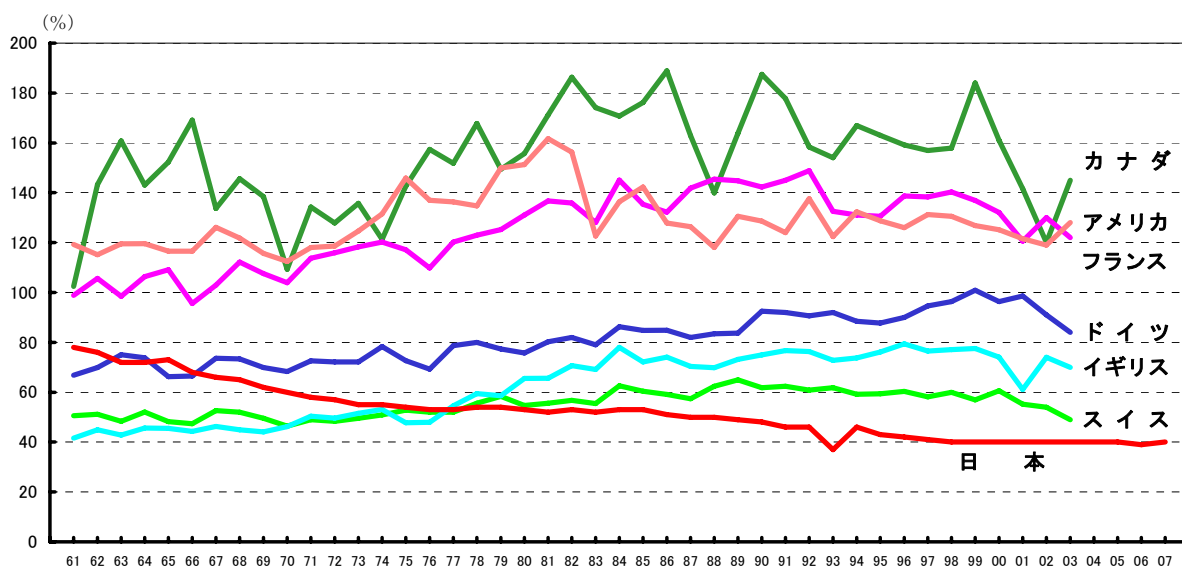


下河辺さん (左)・石毛さん (中)・戸沼 (右)

さて、5月29日の私どもの「食と農」をめぐる対談（下河辺淳アーカイブス—Quarterly Report—Vol.2 2009年7月発行予定）ですが、締めくくりに下河辺さんの発言で、地球温暖化の影響が農にどう影響するか、植物相、動物相にどんな影響を与えるかを勉強する必要があるねということになりましたが、日本の田植え前線の変化に合わせ、日本列島の生態的変動についてモンスーンアジアの稲作も視野に、これを調べてみたいと思っています。

(2009年06月16日)

主要国の供給熱量（カロリーベース）食料自給率の推移



資料: 「食料需給表」など農林水産省データより財団法人日本開発構想研究所作成

